

7.14 大八車騒動顛末

昨晚のことです。

普通、月曜の夜8時は、NHKの「鶴瓶の家族に乾杯」を見ることが多いのですが、たまたま、我が家に来客があって、なぜか水戸黄門を見るとはなしに見る羽目になってしまいました。

水戸黄門様、お年寄りの方に超人気のあるドラマらしいんですが、私は、江戸前期の設定のこの時代劇、時代考証が滅茶苦茶で、とても真面目に見てられないんですね。ということでいつもは敬遠していたんですが。

この日も、冒頭から、でたらめもいいところで、つい、大人げなく文句を言っちゃったんですね。それが原因で大騒動勃発。

昨夜の黄門様、冒頭のシーンは、箱根の関を越えて三島の宿に入った黄門様一行が女スリにあうのですが、荷物を載せた大八車に轢かれそうになった騒動のなか、助さん格さんが巾着と印籠を掏られてしまうのです。

そのどこがでたらめ？

大八車がそこに登場したからです。

江戸時代の三島宿に大八車があったはずがない。

えーっ、嘘でしょ。

そりゃ、江戸時代の日本に馬車がなかったというのは知ってるけど、大八車がなきゃあ、どうやって重たい荷物を運ぶんです？

この前見た浮世絵にも描いてありましたよ。

じゃあ、時代劇で、店の前に空の大八車がおいてあるのって、みんなデタラメ？

よく田舎のなんとか記念館に行くと、昔の生活用具が展示してあるけど、大抵古いのを置いてありますよ。

それから後は、集中攻撃。

だぁーれも信じないんですね、私の言うこと。

あーあ、これほどとは思わなかった。

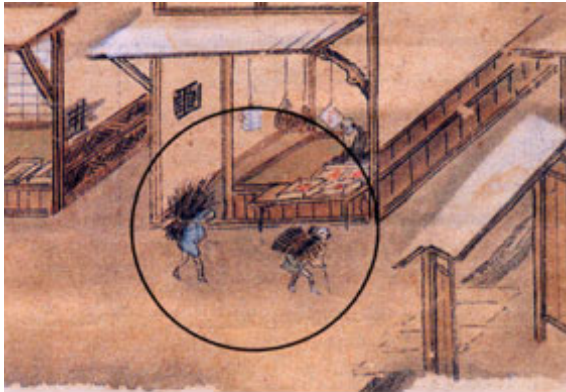
テレビの影響ってすごい。

どうしようもないから、5人を無視して書庫から昔の広島市の広報誌を探し出して見せました。

以下は、その抜粋。

「『広島城下絵屏風』には馬・牛・天秤棒・挟箱などで物を運んでいる風景が見られます。

ところが…、時代劇でおなじみの大八車などの荷車が一台も描かれていないのです。(略) 広島城下に大八車が入ってきたのは幕末のことでした。その事情について、旧広島藩士小鷹狩元凱は「自分が18、9才のころ、広島には荷車というものが一切見られず、米麦薪炭そして木材は人の肩と馬の背で運ぶより他に方法がなかった。(略) 元治元年の冬の長州征伐のおり、軍の総督であった尾張大納言の軍は荷車に荷物を満載して広島に入ったのだ。(略) 翌年、軍が退いた後、荷車は各所に取り残され、やがてこれを使って荷物を運ぶ者が現れた。藩の役人がこれを訊問したところ『これは尾張藩の置き土産なので、車が朽ち果てるまでは黙認してくれ』といったそうです」



広島城収蔵(しゅうぞう)「広島城下絵屏風(びょうぶ)」から

江戸時代に、大八車の使用が認められていたのは、江戸市中、あと尾張、駿府、それも使用に当たっては、特別な申請と認可が必要だったのですね。

そもそも、大八車は明暦の大火(1657年)の後、江戸の町の大改造を早急に行わなければならなかったときに、土石などを運ぶのに発明されたのですが、その使用は厳しく制限され、これより小さい「ベカ車」も京都と大阪で使用が認められていただけで、その他の地域では、全ての荷駄は、人が運ぶか、牛馬の背中に乗せるしかなかったのですね。

ちなみに、大八車は、人の8人分の荷物を運べるため「代八車」と呼ばれていたみたいですよ。



戦国時代は、兵糧を運ぶために荷車が使用されていた記録があり、信長クンは、これを大量に早く運ぶために、所領内に荷車がすれ違うことができる三間二尺の道を整備していたという記録がありますから、家康クンは、きっと、軍事的観点から、自分の目が行き届く範囲以外での荷車の使用を禁止したのでしょうかねえ。

おかげで、今も、私達の町には、幅が 1 間半の道が沢山残っているのですが、これは、悲しむべきなのでしょう、喜ぶべきなのでしょう、どちらでしょうねえ。

まあ、とにかく、私は、今回の大騒動で、改めて、もうちょっと社会科の教育で、私達の生活のことを教えた方がいいんじゃないかなあ、って痛感したのですが、どう思います？

8.27 縞の合羽ならぬ紙の合羽

少し前に書いた「三度笠」の話（言葉「三度笠」参照。）で、合羽のことに触れましたところ、ある方から「紙の合羽には蠟を塗っていたのでしょうか」というお尋ねがありました。

これは、実にもっともなお尋ねで、丈夫な和紙でできているとはいえ、そのままでは、雨に濡れると、さすがに破れてしまうことは歴然ですね。

結論から申し上げますと、

庶民の紙合羽の場合は、柿渋を引いた上に、安い桐油が塗られていて、「桐油合羽」と言われていました。

「庶民の」と限定したのは、もっと上質のものも売られており、これは桐油の代わりに「荏ゴマの油」が使われていたり、「漆」が塗られていたようです。

前回の話でも少しだけ触れましたが、もともと合羽は、16世紀に日本にやってきた宣教師達が羽織っていた雨除けの外套（capa）が元祖です。

新しもの好きで有名な織田信長クンが、猩々緋色の羊毛（羅紗）でできた capa を格好良く羽織った絵を見たことがある方もおられると思います。

実は、これに憧れた「猿」こと、秀吉クン、天下の覇者になって、大阪城で同じものを着たようなのですが、さすがに似合わなかったようです。

想像すると愉快ですね。ハ、ハ。

江戸時代に入っても、豪商達は、豪華な合羽を作って着ていたようなのですが、万事贅沢を嫌う幕府が元禄時代にこれを禁止したため、豪華合羽は、木綿の合羽に姿を変えざるを得なくなってしまいます。

それでも高かった木綿の合羽に代わって、紙の合羽が発明されたのは、元禄後期。

和紙に、柿渋と油を塗った安い「紙合羽」は、庶民の間にあっという間に普及し、その後でできた携帯用の「懐中合羽」は爆発的に売れたようです。

日本人は、昔から「携帯」に弱いようですねえ。



ところで、本格的な旅人が着ていたのが、「縞の合羽」。



こちらは、本格的な風雨除け。

木枯らし紋次郎クンも縞の合羽を着ていましたねえ。

こちらはかなり高かったようですが、それもそのはず、実は、あの縞の合羽は、三重構造なのです。

ものの本に寄りますと、

まず、表地は縞木綿。

裏地がついていて、裏地は緋（かすり）木綿。

そして、この表地と裏地の間に、防水用の桐油を塗った渋紙が挟んであり、表地の縞木綿が濡れても裏地には浸透しないようにできていました。

この縞の合羽は、「廻し合羽」或いは「引き廻し」と呼ばれていたと書いてあります。

ところで、紙合羽には、漆が塗られているものもあったことが、喜田川守貞によって書かれた江戸風俗事典とでも言える「守貞漫稿」に載っています。

「紙合羽は白或いは青漆或いは辨柄（べんがら）ぬり黒等也」

ついでに、この青漆を塗った紙合羽を詠んだ狂歌を一つ。

せいしつと いえどももめる 紙合羽 油断がならぬ あめが下かな

「せいしつ」には、「青漆（青うるし）」と、「静謐」と「正室」と掛けられていますね。「あめが下」には、「雨が下」と「天が下」が掛けられていますから、これ、なかなか意味深ですねえ。

1.31 大木戸

先日、木戸番小屋の話（四季…余寒「赤穂義士の討入りと木戸番小屋」参照。）をしました。今日は「大木戸」のお話。

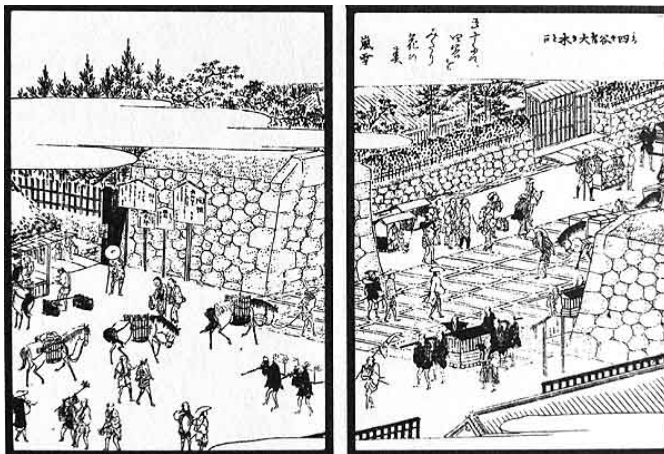
「大木戸」というから、木戸の大きなもの？

まあ、そういえるかも知れないけれど、これは、江戸に出入りする人をチェックしていた幕府の検問所なのです。江戸には、主な街道ごとに、大木戸が設けられていました。今だと入国管理ゲートかな。

現在、その場所が特定できるのは高輪と四谷だけだそうです。

高輪は東海道、四谷は甲州街道の江戸市街地への入り口に置かれていました。

下の絵は、「四谷の大木戸」。



大木戸の外は、江戸の外、大木戸から中は江戸市内。

ここで通行手形があらためられました。

四谷の大木戸は、今の四谷四丁目の交差点のところにありました。右が江戸市中、左が内藤新宿。

大木戸から西は、信州高遠藩「内藤家」の広大な下屋敷(このあたりの地図については、次の「水番と五月の鯉」に掲げる切り絵図を参照してもらおうと、左下の白い部分が内藤家下屋敷)になっていたのですが、幕府は、その一部を召しあげ、新しい宿駅を整備しました。

これが「内藤新宿」といわれ、甲州街道の最初の宿場となります。

後に「内藤家」が忘れられて、単なる「新宿」になってしまいました。

(内藤さん、カワイソ～)

ちなみに、内藤家の下屋敷跡は、今、新宿御苑となっています（天皇陛下がお出でになる観桜会や観菊会で有名ですね）。

四谷大木戸から少し西に行ったところに、T字路がありまして、そのまま直進すると青

梅街道。甲州街道は、左折して一旦南に下がり、すぐに再び西に方向を変えて、今の新宿駅の南口を経て、府中に向かいます。

この分岐点は昔から追分と呼ばれていて、古くから団子屋さんがありました。有名な「追分団子」で、今もあります。



ちなみに、私が若い頃は、四谷大木戸附近には芸者さんの置屋がかなりありました。なぜそんなこと知ってるんだって？

私にも、若くて元気で、芸者さんと遊んだ頃があったんですよ。エヘ。

四谷から新宿にかけて、かつて沢山存在した料亭で呼ぶ芸者さんの殆どは、四谷大木戸付近の置屋さんから派遣されていました。

これは、昔内藤新宿にあった歓楽街の名残ではないでしょうか。

遊んでいた頃には知らなかったのですがね。

さて、一方、お伊勢参りや長崎留学で東海道を下っていく旅人を見送る方々は、「高輪の大木戸」で、旅人と別れを告げます。

昔の旅は、今と違い、別れがそのまま永久の別れになってしまうことが稀ではなかっただけに、見送る人、見送られる人がここで長い別れを惜しむのです。

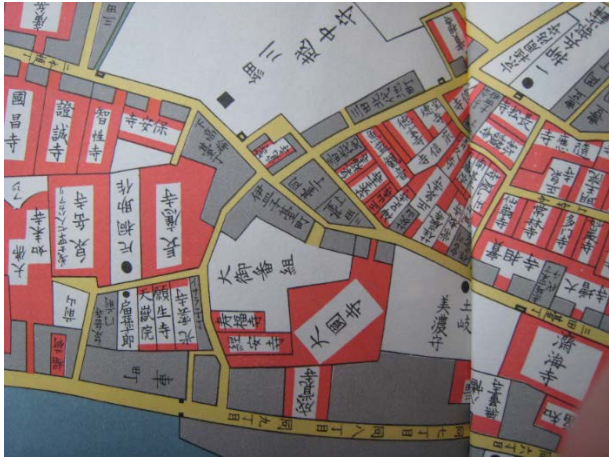
きっと、辛い別れや嬉しい再会があったに違いありません。

大木戸は、そういう別れと再会の場所でもありました。

最後に、下の絵図は、東海道高輪の車町の手前にあった大木戸付近の切り絵図。

東海道は、海岸に沿って走っていますが、地図の左端に近い「車町」の手前に [■ ■] が見えますよね。ちょっと見にくいけれど、これが高輪大木戸。

ついでに、車町の左斜め上に、赤穂義士が眠る泉岳寺。その近くにある細川越中守中屋敷が大石内蔵助が腹を切った場所。



もう一つ、蛇足ですが、この切り絵図の右下の方、海岸沿いにある「薩州クラヤシキ」（残念ながらこの切り絵図の写真では少し外れていて見えません）は、有名な西郷吉之助さんと勝海舟さんが話し合って、江戸無血開城を決めた場所。

このあたりの江戸切り絵図を見ていると、いつの間にかタイムスリップしてそこに立っている気になります。

2.2 水番と五月の鯉

先に木戸番の話をしたことがありましたが、今日は、木戸番ではなくて「水番」のお話。

水のないところでは、人間は暮らしていきません。

どんな都市でもそうですが、そこに住むことのできる人の数は、基本的に、確保できる水の量に左右されます。

私たちの生活では、水道の蛇口を回せば、水が出てきますので、普段、私たちは、このことを意識せずに暮らしているのですが、それでも、この事実が変わりはありません。

豊富な水に恵まれていると言われているわが国では、通常、毎秒1トンの水（一日に直すと8万6400トンの水）で不自由なく暮らしていける人間の数は、約20万人といわれています。

100万人の都市の場合、毎秒5トンの水が必要になるわけです。東京圏1都3県の人口は大体3300万ですから、飲み水だけで毎秒165トン、一日の量では1400万トンのぼる膨大な水が要るのです。

これだけの水は確保されているのかって？

最近、誰も余り問題にしないのですが、実際は大変不安定なようです。

でも最近断水などないんじゃない？

これは、たまたま台風などがタイミング良くきていただいているので、これまでは何とかあったということみたいですよ。

実際に、渴水になったらどうするのでしょうかね。農業用水などから水を買うのですかね。ダムに反対している人は、断水の時に率先して我慢してくれるンでしょうかね。

ところで、福島県に郡山市という都市がありますが、この近くには、昔「安達ヶ原」と呼ばれた原野があって、そこは水がないために、耕作もできず、人も住めず、鬼婆が旅人を取って食う伝説があるようなところでした。

郡山の周辺が今のように発展できたのは、明治になって、明治政府が猪苗代湖と郡山を結ぶ安積疎水を造り、安定的な水を確保したからなのです。

徳川家康さんが入府したときの江戸も、水の確保が最大の問題でした。

江戸では、井戸を掘っても飲める水が出ないことが多かったのです。

家康さんが何よりも先にしたことは、井の頭池などを水源とする「神田上水」の整備で、入府前の1590年から整備を始めて、全てが完成したのは1629年のことでした。

もとより、これだけでは、すぐに足りなくなることは明らかでしたので、続いて幕府は、

玉川上水の工事に着手します。

多摩川の上流、羽村の堰から延々43 kmにわたって自然流下方式の水路を作って江戸まで水を運ぼうとしたのです。玉川上水の完成は、1654年のことでした。

当時、町方だけで既に30万人を超える人口を抱えていた大都市江戸は、玉川上水によって、漸く安定的な水を確保することができたわけです。

羽村から取水された玉川上水の終点は、前に話に出た四谷大木戸です（江戸の暮らし「大木戸」参照）。

四谷大木戸の隣には、水番所が置かれ、ここから、水道管(暗渠樋管)で江戸市中に配水されていました。下の図真ん中に四谷大木戸と水番所が見えます。



大川の向こう側を除いて、江戸市中には、地下水道が張り巡らされ、江戸は世界に冠たる水道の整備された都市でした。

水番の仕事は、渇水時に羽村から四谷に導水される水量の確保、洪水時に濁った水が水道管に流れ込まないようにするなど、極めて重要なものでしたので、水番は、木戸番とは大違い、厳重な資格審査、身元審査を経て任命されました。当然ですね。

渇水の時はどうしたのかって？

幕府は、玉川上水の途中から取水を許していた農業用水を止めて、水道を優先していたようです。

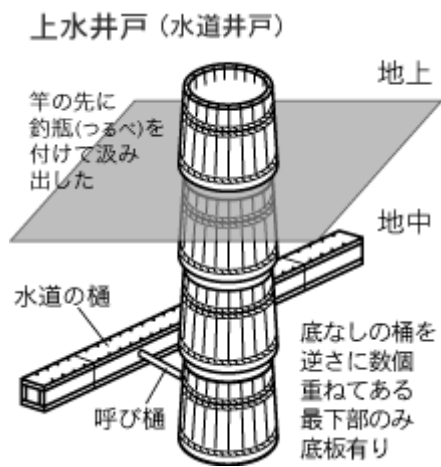
逆に洪水時には、早飛脚や早馬で43里を連絡して、取水のコントロールをしたり、濁った水が水道に入り込まないように、苦労したようです。

溢れる水は、余水吐きから、内藤駿河の守の屋敷を貫いて、渋谷川へと流されましたが、この水は、渋谷川→古川→赤羽川→金杉川→江戸湾へと流れていました。先ほどの地図で、下の方に流れている川がそれ。

現在の地図を見ると、古川橋、赤羽橋、金杉橋などの地名が残っています。

洪水の後には、時折、市中の井戸に魚が入り込んで泳いでいたこともあるようです。

有り難さ 稀に井戸より 鮎を汲み



江戸っ子は、この水道を大変誇りにしていました。

出来の悪い時代劇では、「こちとらあ、水道の水で産湯を使った江戸っ子でえ」なんて、ときどき啖呵を切ってますよね。

でも、こういうのに限って、「五月の鯉」って言われていたみたい。

なんで五月の鯉？

だって、口ばかり。

2.20 呉服・太物

時代劇を見ていると、商店に「呉服太物」という看板が掛かっているのをご覧になったことがあると思います。下の絵は、大丸屋呉服太物店。



この商店が何を売っているかを知らない人はいないと思います。

それは、「呉服」という言葉が、今も使われているからです。

しかし、江戸時代の「呉服」は、呉（魏、呉、蜀の呉）の国から伝えられた織り方で作られた織物と言う意味で、絹織物のことを指していました。

浮世絵で見ると、大丸と越後屋(三越)は呉服と太物店を兼ねており、松坂屋は呉服店だったのですね。

ところで、「太物」とはなにか。

こちらの方は正確に知っておられる方はそれほど多くはありませんが、大体推測がつくと思いますね。

そうです。

木綿或いは麻等でできた太い糸で織った織物ですが、

木綿や麻の織物は、絹に比べ厚地であるために、太物といわれたものです。

ふと物の 庭の芭蕉葉 五六端 〈信徳〉

しかし、江戸時代、太物といえど、庶民にとっては大変高価なものでした。

このため、新品を買える庶民は余りおらず、古着を買うのが普通で、しかも江戸庶民は、徹底的にこれを使い切りました。

江戸は、世界で一番のリサイクル都市だったということは、最近よく知られるようになってきましたが、古着屋さんには、重要な商売で、大変数が多く、2000軒を超す店が江戸にあったことが知られています。

ちなみに、現在百貨店で有名な「そごう」は、古着屋であった「大和屋」が起りです。

ところで、古着屋さんの中でも、クラスが分かれていて、一等が日本橋富沢町に店を構えているクラス、次が柳原の土手、最後に棒手振りの担ぎの古着売り。

日本橋富沢町は、江戸開府時代、家康さんが、大泥棒の鳶沢甚内に、泥棒を止める代わりに、古着屋の免許を与えた場所で、日本の古着屋の由緒ある？発祥地。

柳原土手は、和泉橋界隈の神田川南岸の土手のことで、土手沿いに簡易店舗が並んで、小規模な古着の商いをしたところ。



最後の棒手振りの古着売りは、店を出すことができない零細な個人営業。



着物って結構重いですよね。

これだけの太物を竹馬に乗せて背負って歩くのは大変だったと思います。

若い頃しかできない商売です。

竹馬の 小口に赤い やつをさげ (柳多留)

上の絵で、この古着売りから太物を買おうとしているこの女性は、

「地もいとうすく色もさめつれば価は安からん」

(これは地が薄くなっているし、色も褪せているから、きっと安いんでしょうねえ)

と言っているのです。

太物だから長く使って「薄く」なってくると安くなるのですね。

それにしても、さすがに女性、いつの時代でも一円でも安く、あ間違い、一文でも安く買うために値切るのですね。

ところで、現在の百貨店は、衣類を扱う店から発展したものが多いいせいか、ファッションにかなりの店舗面積を割いています。

しかし、皮肉なことに、今は、この部分が経営の足を引っ張っているようですね。ユニクロをはじめとして安くて着心地のいい服を売る店が増えたため、今の庶民は、普段着だけでなくよそ行きの服も百貨店で買うことは少なくなり、売上げは昔と比べて大幅に減少しています。

江戸時代からの伝統を引き継いでいる百貨店も（最近では大型スーパーも）、「衣」ではやっていけなくなり、苦難の時代を迎えているのですね。

2.21 江戸の着物

昨日に続いて着物の話。

考えてみると当たり前のことですが、ホントに安い服を買える今の私たちがつつい忘れがちになるのが、当時の着物はものすごく高かったという事実です。

絹の着物が高いのは今も昔も同じですが、太物の着物も、植物の繊維を手織りしたものでしたから、1反作り上げるのは大変で、このため太物と言えども衣服は大変な貴重品でした。

農家の女性たちは、太物の織物を織ることができることが嫁入りの際の大切な資格で、大変重要な収入源になっていたようです。

このため各地で、その土地特有の様々な織物が織られました。

万葉集から、鶴の恩返しまで、歌や民話に、機織りが出てきますし、そこから生まれた歌が沢山ありますね。

さて江戸時代の庶民は、着物を何枚くらい持っていたと思いますか？

まず、江戸時代の大工さんの年収は、江戸庶民の中でもまあまあ高くて 500 万円程度。

「衣」「食」「住」のうち、最も多くかかっていたのが「食」で、お米、副食、薪で 350 万円。エンゲル係数は 7 割と非常に高かった。

家賃（四畳半二間）は意外と低くて 40 万円、

衣類に必要な費用は同じくらいで 40 万円。

住居費と同じくらいかかっているのですね。

おかみさんが持っている着物は 3～5 枚。亭主の大工さんは、仕事で汗をかくから、毎日洗わなければならないので、それより多くて、4～6 枚。

冬はともかく、夏には井戸端で毎日洗濯していたのでしょね。

上級武士以外の場合、武士の家でも、普段の着物は太物で、たいてい古着でした。

映画「武士の家計簿」で、松坂慶子さんが演ずる猪山家の奥様、自分の絹の着物が売られるときに泣きわめきますが、今だと、ダイヤの婚約指輪をとられる気持ちでしょうか。

(猪山家記録によると紅小袖の売却代金 42 万円、地黒小袖同 62 万円)



映画の中、松坂慶子さんが死の床にあるシーンで、仲間由紀恵さんが、その着物を取り戻して、松坂さんに掛けてあげてますね。指輪より大切なものだったんですね。

普通の庶民の場合、当然新品の着物を買うのは殆ど不可能で、着物を買うと言えば古着が当たり前でした。

江戸庶民は、古着屋で着物を買って、古くなると子供用に作り直す。小さくしていなくなった部分は端切れ屋に売る。

子供用でも使えなくなると、赤ん坊のおしめに。

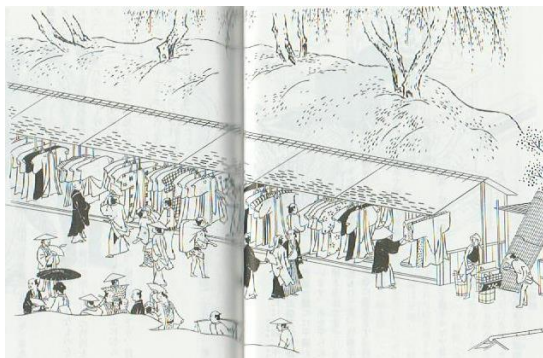
おしめがとれると、雑巾に。

雑巾として使えなくなると、焚きつけに。

この焚きつけ灰は、灰買い屋に。洗濯や肥料に使ったのですね。

古着屋は、前回申しあげましたように、江戸には 2000 軒以上もありましたが、庶民は、柳原の土手にあった古着屋街に行くか、街に回ってくる棒手振りの担ぎ屋から買っていました。

柳原の古着屋街は、なんせ土手ですから、間口九尺、奥行三尺の小屋づくり。雨が降ると自然休業です。



さて、この古着屋さん、どこから古着を手に入れていたんでしょうか。

物の本によると、仕入れ先は、大体四つ。

第一は、直接古着屋に個人が持ち込む場合

第二は、古着買い（こういう商売があったのです）が街を回って買ってくる場合

第三は、質流れの着物（8ヶ月で流れていました）

そして、四つ目が盗品を買うケース。

もちろん、四番目は違法なのですが、そこはそれ、蛇の道は蛇。結構お目こぼしがあったみたい。そういえば、目明かしが古着屋から盗っ人を探し出すという小説もありました。

ところで、サザエさんの漫画に昔ときどき出てきていた空き巣狙いのおじさん。

見たことありますか？

口の周りに黒いひげを生やして、頬っかむりをして、唐草模様の風呂敷を担いでいますよね。

あれ、丸いでしょ。

あれね、中身の殆どは使い物になる着物なんですね。もちろん貯金通帳もあるでしょうけど、ちょっと前まで、うちの中にある最も高いものは着物だったんですね。

今、衣類は、泥棒どころか、猫も見向きもしない。

そういえば、最近、サザエさんにも、空き巣さん出てこなくなったなあ。

ちょっと淋しい。

2.22 古着屋総兵衛

しつこく、今日も古着の話。

古着屋さんを取り上げている時代小説、佐伯泰英さんの「古着屋総兵衛影始末」シリーズは、なかなか面白くて楽しめます。

これはまあ、読んでいただくしかないのですが、家康は、江戸を荒らす盗賊、鳶沢甚内成元を捕らえた際に、命を助ける代わりに、彼に無法者達を一掃させ、徳川のために密かに情報収集をすることを命じます。

鳶沢甚内は、自分の手下の暮らし向きの確保のために、古着屋の免許を願い、元締めを許されるのです。

彼は、江戸の町に古着屋大黒屋を開き、そこを拠点に隠密活動を行うのですが、元禄の時代になって、権勢を握った柳沢吉保と暗闘を繰り広げるといってお話。

この小説、柳沢吉保との話とはともかく、前提のところはかなり史実に基づいていて、三田村鳶魚が書いた「江戸の白浪」には、「富沢町の古着市」として、この辺りのことが詳しく書かれています。

ちなみに、小説の中の大黒屋は、浜町通りと富沢町を2つに分ける通りの角地に建っていたそうです。

この富沢町、もとは鳶沢甚内の名前から鳶沢町と言われていたんですが、後に富沢町に変更されたものです。

ところで、昨日の話で書きましたように、古着屋さんの古着の仕入れ先の一つに、街を回って古着を買ってくる「古着買い」からのものがありました。

これ、二人一組で街を回っていました。

二人で、袋を肩に担いで、分担して通りの両側を歩きながら、「古着、買いましょう」といいながら、家の中の様子を窺うのですね。

声がかかったところでは、家の中に上がり込んで、話をしながら古着を集めて回るのですから、江戸の巷で流れている情報や実際の動きなどが手に取るようにわかりますし、その家の間取りや生活までも見て取ることができるのです。

なにせ、元はドロボーさんですから。

下の絵にある通りです。



こうしたことから、古着買いの元締めが、誰よりも江戸の街の情報に詳しくしたのは当然なのです。

一方、盗まれた着物も古着屋に集まってきますから、古着屋は、当然裏の世界にもつながりを持ち、そちらの方の裏情報も集まってきます。

「質屋、古着屋、古着買い、古道具屋、小道具屋、唐物商、古鉄屋、古鉄買い」の八つの商売は、昔から盗品を扱うことが多かったため、幕府は、これらの商売をする者に組合を作らせ、どこの誰が品物を売りに来たかを帳面に記録させていました。

盗品のロンダリングの防止ですね。

これらの商売を営むものは、闇の世界にも通じ、他方で、盗賊の逮捕にも協力したのです。

古着屋さんは、江戸のリサイクルだけでなく、治安にも貢献していたのですねえ。

家康さん、こういうところは、まあよく悪知恵が回るひとですね。

感心してしまいます。

淀さんや秀頼さんが負けるのもやむを得ないかなあ。

6.27 酔いどれ小藤次

今、NHKのBS金曜時代劇で「酔いどれ小藤次」ってドラマやっているのをご覧になったことがありますか。

私、テレビドラマってあまり見ないのですが、良い時代劇は別。

「酔いどれ小藤次」の原作者は、佐伯泰英。

「陽炎の辻（居眠り磐音江戸双紙）」や「古着屋総兵衛」などの作者ですね。

この「酔いどれ小藤次」、最初、連続ドラマではなく、今年の正月に単発で「御鑓拝借」を放映したところ、評判が良くて連続シリーズになったみたいです。

ご覧になった方にはパスしていただくとして、ごく簡潔にあらすじを申し上げますと、

第一作目の「御鑓拝借」は、小藤次の主君である豊後森藩の久留島侯が、江戸城内で、朋輩大名から、「城無し大名」よと嘲られたのですが、その恥辱を晴らそうと、嘲った大名の行列を単身で襲い、行列のシンボルである「御鑓(おやり)」を奪い、日本橋に晒そうというストーリーで、竹中直人扮する冴えない初老の下級藩士「赤目小藤次」が大活躍するものです。

赤目小藤次、御鑓を奪うに当たって、主君に罪が及ぶのを避けるため、わざと大酒飲み大会に参加し、不届き者との汚名を着て藩を致仕するのですが、この大酒飲み大会は、本当にあった出来事。

滝沢馬琴の「兎園小説」によりますと、文化14年(1831年)3月23日、両国柳橋の「万八楼」で大酒大食の会が催されたと書かれており、その一位は、芝口の鯉屋利兵衛30歳で、1斗9升5合を飲んでぶっ倒れ、しばらくして目を覚ましてから水を茶碗で17杯飲んだとされています。

小説では、赤目小藤次はこのとき第二位。

今の日本酒よりアルコール度数が低かったとはいえ、それにしても、すごいですねえ。

ちなみに、大食い大会の方の飯の部一位は、浅草の和泉屋吉蔵73歳で、飯54杯、唐辛子58本とされています。こっちはスゴイ。

この万八楼は、神田川が大川（隅田川）に流れ込む地点、柳橋の袂にあった高級料亭ですが、万八楼で客を迎えた柳橋芸者は、権勢に媚びず、気っぷの良いことで有名でした。

ドラマでは、その女将を鶴田真由さんが好演しています。

下の絵は、柳橋万八楼。



「湯島の白梅」で有名な「お蔦、主税」のお蔦さんも、「明治一代女」のお梅さんも、柳橋芸者ですが、どちらも歌や舞台となるほどの心意気です。

- ♪ 忘れられよか 筒井筒
岸の柳の 縁結び
堅い契りを 義理ゆえに
水に流すも 江戸育ち (湯島の白梅 2 番)

- ♪ 怨みますまい この世の事は
仕掛け花火に 似た命
もえて散る間に 舞台が変わる
まして女は なおさらに (明治一代女 2 番)

幕末、万八楼は、亀清楼に引き継がれますが、この亀清楼は、今でも柳橋の橋のたもとに現存しています。

ところで、豊後森藩は、久留島家 1 万 4 千石。もとは、伊予来島を領し、村上水軍の将として勇名をはせるのですが、関ヶ原で西軍に属したため、海に面しない豊後玖珠に移されました。

森藩久留島家は、小説の通り、城を持たない「無城大名」ですが、実際は、いざというときに備えて小高い丘上に城に近い館を持ち、しかも近くに堅固な城跡を持っていましたから、十分戦闘力はあったと思われます。城無しと嘲られたときには悔しかったでしょうね。



江戸幕府の大名の格には、国主大名（国持ち大名）、準国主大名、城主大名、城主格大名、無城大名（陣屋大名）がありましたが、国持ち大名は 18、準国主と城主大名が 128、城主格と無城大名が 121 ですから、別に、無城が少数というわけではなかったのですね。

豊後森藩の町、玖珠については、私のブログフレンドAさんの日記に、館の写真を含む訪問記がアップされたことがあるのですが、これを拝見しても美しい陣屋です。

豊後には、Aさんの住む「臼杵」、陽炎の辻の坂崎磐音の関前藩に当たる「杵築」、滝廉太郎の父祖が家老職にあった「日出（ひじ）」、荒城の月で有名な竹田の「岡」、いずれも美しい城跡を持ち、今も昔の町並みを残すところが多いのですが、城こそないものの、森藩の「玖珠」も、これらに劣らぬ美しいところだと思います。

9.4 有楽町の南町奉行所

昨日、久しぶりに有楽町まで映画を見に行きました。

一頃より涼しくなったとは言え、30度の暑さの中を汗を流しながら仕事をしている人を横目に、ポロシャツで有楽町の町をゆっくり歩くのは、ちょっと優越感を感じてしまいます。

映画自体は、ブラックスワンのナタリー・ポートマンがでていうだけのつまらないもので、選択失敗。

終わって、お茶でも飲もうと外に出ると、なんと、目の前に「南町奉行所跡」の説明版が。

ん、こんなところに、こんなのあったっけ。

読むと、この辺りは、江戸時代の南町奉行所があったところと書いてある。

あー、カメラを持ってこなかったのが残念。

南町奉行所と言えば、大岡越前の守忠相。

今伝えられている名裁判の殆どは後の世の創作らしいのですが、三方一両損なんか、今の最高裁判事が「僕も20万円出すから、これで良いことにしようよ」なんて和解勧告したら、みんななんと言うかなあ、と考えるだけで愉快。

江戸の南北二つの奉行所は、大変広い業務を受け持っていたんだけど、これが地域割りではなくて、月番、非番と隔月交代で開庁していたのだということは、今では、歴史に興味のある人であれば、殆どの人知っていることです。

意外と知られていないのは、これは民事裁判の話にかぎってということ。

なんせ、毎日30件近い訴訟が提起されていたのですから、審理に並行して、調査や前例調べをする時間を確保するために、閉庁が必要だったんですね。

つまり非番の奉行所は門を閉じて訴訟の受理はしなかったけれど、仕事はしていたんですね。

また、非番の奉行所に属する定町廻り、隠密廻り、臨時廻り同心達も、当然、捜査は続けていて休んだりしていません。

ですから、刑事裁判の方は、月番非番制ではなく、常時開庁。

御奉行さんは、幕府一番の大変な激職だったようで、毎夜遅くまで仕事をしなければならず、3000石程度の手当では引き合わなかったみたいです。(何人も過労死しています)

でも刑事裁判の方は、罰則(御定書)が厳しかったせいか、御白洲に来る前に、事前処理が行われるのが普通だったようです。

このため、数は少なかった？

例えば、密通は御定書では死罪。

でも、いつの世も、密通（今は死語なので、フリン？）がない社会なんてあり得ないわけで、これをみんな死罪にしてしまうと、至る所で大騒ぎですね。

そこで、普通は、裁判沙汰の前に、示談で済ませる。

なかには、しょうのないヤツがいて、この仕組みを悪用して示談金目当ての美人局（つつもたせ）をするのがいる。

据えられて 七両二分の 膳を食ひ

江戸のフリンの示談金の相場は 7 両二分だったのですね。

今だと 100～150 万円くらい？

窃盗罪は、今なら 10 年以下の懲役又は 50 万円以下の罰金なのですが、御定書では、随分重く、10 両以上盗むと死罪。

だから、被害者は、盗まれても盗難届を出さずに示談するのか普通で、どうしようもなくなると、被害は 9 両 3 分 2 朱（9 両 + 3/4 両 + 1/8 両 = 9 両と 7/8 両）と書いたのですね。

どうして 九両（くれよう）三分二朱

ところで、町奉行所の警察権限と重なるのが、火付盗賊改。

私、昔、奉行所があるのに、どうして？ と思ったことがありました。

そのときに調べて覚えていることとしては、この組織、江戸市中に大規模な武装盗賊団が活動しているときに、臨時に置かれたもののようで、奉行所の取り締まりでは対応できない「組織強盗」向けだったようです。

今でも、外国などでは、警察組織とは別に、警察軍があるところがありますが、短銃、ライフル程度ではなく、機関銃や装甲車を持っているようです。これと似てますかね。

火付盗賊改は、幕府の先手組の組織。

長谷川平蔵さん、先手組の組頭ですから、「お頭（かしら）」って呼ばれてますね。

原則切り捨て御免、捕まえるより制圧するのが目的なんですね。

だから、裁判権は基本的にありませんでした。

これに対して、奉行所は、犯罪者を捕まえて裁判にかけるのが目的。

だから、基本的には斬り殺さない。

十手や刺股で取り押さえるのが普通です。

それにしても、最近の時代劇では、斬り殺しすぎるんじゃないかと私は思うのですがねえ。

9.3 ちょんまげ

最近、良い時代劇がめっきり少なくなって、うっかり内容について文句でも言うと、時代劇をご覧になっている方が「なんだ、そうか、出鱈目か」なんて思われて、結果的に視聴率が下がってしまって、中止に追い込まれることにつながるかも（これは全く根拠のない推測）と思うと、言いたいことも言えないで、私、最近少々欲求不満気味なんですネ。

え、また、テレビを観ながら文句言ってる、家族からなんか言われたんじゃないかって？
エ、へ、へ。

そう、世の中は、時代劇といえども、楽しいのが第一、正しい知識なんて、邪魔、ジャマ、じゃまーあー。

と言われました。

ああ、なんと正論が通らぬ世の中になってしまったのでしょうかねえ。

ところで、文句を言うばかりと思われがちの私ですが、時代劇を見ていて、非常に気になりながら、今に至るまでよく分からないなあと思っていることが二つあるのです。

二つとも、江戸時代の風俗画を見ていて思うことなのですが、
一つは、江戸時代の男の頭の髷（まげ）の形。
もう一つは、居酒屋に置かれているテーブル？

どちらも、風俗画とテレビや映画の中の時代劇とではかなり違うのです。
気になると調べたくなるクセのある私、結構調べたつもりなのですが、なかなか決定的な結論が出ないのです。

大昔のことじゃあるまいし、ちょっと調べればすぐわかると高を括っていたのですが、江戸時代の風俗百科全書である「守貞漫稿」や「喜遊笑覧」を見ただけではわからなかったし、「封建時代の結髪様式」、「江戸っ子のチョンマゲ」という本も見ましたが、ダメ。

まあ、時間はたっぷりあることだし、慌てて調べることもないかと思ってほったらかしにしていたので、今に至るまでわからないまま。

え、どこが気になるかって？

まず男の頭の上に鎮座しているマゲの形から。

時代劇の場合は、お侍さんも町人さんも、同じで、結構太いマゲがどんと頭の上に乗っかってますね。

アレ、どうやら一時期に大変流行った「本多まげ」というらしいのですが、風俗画を見るとあんな立派なまげを結ってるのは、お相撲さんくらいで、どの絵を見ても、正面か

ら見ると、まげなんて見えないのじゃないかと思うくらい、後ろの方に細いのが乗っかってるのが殆どなんですね。



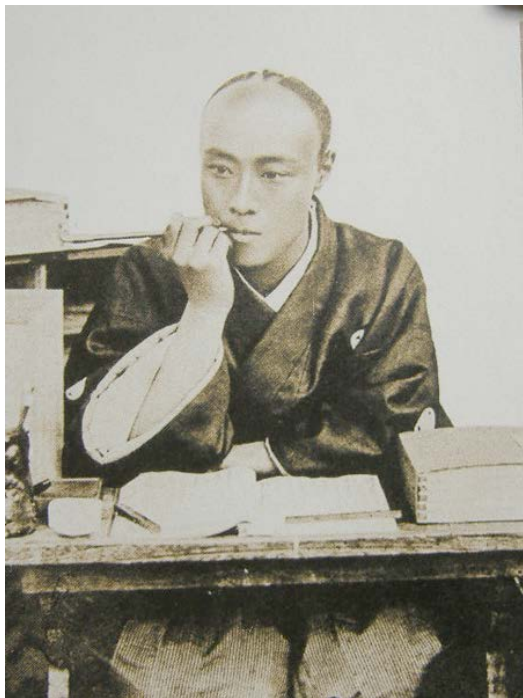
お侍さんの場合、ごく稀に太いのが描かれているのを見かけるけれど、これは、大名の殿様や高級旗本さんに限られていて、普通？のお侍さんの場合は、後ろで束ねた髪の手を折り返して余った先っぽをちょこんと頭に乗つけたようになっている。

それも、時代劇のように、べったり鬢付け油で固めて乗せているのと違って、先っぽが銀杏の葉っぱみたいに広がっているのが多いのですね。

風俗画だけでは心許ないから、幕末に撮られた写真に写っているのを見ると、もっとちょん乗せで、前からはマゲなんて見えないし、あんなにボテッとしたものはまず見あたらない。写真は、遣欧使節の一員の河津伊豆の守。



豚一こと、徳川慶喜クンのマゲは、写真で見ると、幅 1~2 cmの細一いのが、すっと乗ってる。



じゃあ、時代劇のは出鱈目かと思うと、そうでもないらしくて、
どうも、地方地方、時代時代で、流行廃りがあって、いろんな形があったんじゃないか
と思えるのですね。
考えてみれば、今と同じですかね。今でもモヒカンや爆発したようなのがありますもん
ネ。

でも、時代劇に登場するあの形が普遍的でなかったことは間違いないと思うのですね。どうしてって、武士の家計簿じゃないけれど、毎日、あの形に頭を整えてると、お金がかかってしょうがないですからね。

おそらく、たいていの男達は、お嫁さんかお袋さんに後ろから髪を引っ張ってもらって、元結いで束ねて、折り返した先を乗っけていただけだったんじゃないかなあ、と思う次第。

あ、江戸の男のマゲのことを、一般的に丁髷（チョンマゲ）と呼ぶ人がいますけれど、本来のチョンマゲは、髪が少なくなった老人が「ㄣ」の形にしか結えなかったまげを、チョンマゲと呼んで、老人頭をからかった言葉なんですね。でも、今の私達には、風俗画を見る限り、若いモンの頭も、チョンマゲと変わらないように見えますけどね。

あ、とりとめもなく書いているうちに、字数オーバーになってきました。居酒屋の話は、また別の機会に。

9.5 江戸の居酒屋のテーブル席

先日、時代劇を見ていてよく分からないことの一つに、男のマゲの形があると申し上げましたが、今日は、その時に言い残したもう一つの疑問、「居酒屋のテーブル？」について聞いてもらいたいです。

まず、下の写真をご覧くださいなのですが、これは、鬼平犯科帳の一場面。長谷川平蔵役の中村吉右衛門さんと松平健さん（だと思ふ。確か盗賊改めと盗賊の頭）が並んで仲良く、居酒屋で一杯傾けているところです。



鬼平犯科帳に限らず、およそ時代劇では、ごく普通に出てくるシーンですから、これを不思議に思われる方はあまりおられないのではないかと思います。

私もそうだったのですが、実は少し前から、このシーンに少しずつ違和感を感じるようになってきたのです。

え、どこが？

と正面切って言われると困るのですが、違和感の元は、この写真の二人の前にあるテーブル？なのです。

今は、どこの居酒屋に入っても、まず間違いなくあるこのテーブル。居酒屋だけでなく、蕎麦屋にも、ラーメン屋にも、およそ飲食店の店内には必ずあるテーブル席。

江戸時代の居酒屋にあっても、おかしくないですよ。

でも、これ、当時は、何と呼ばれていたのでしょうかね。食台？ 食卓机？調べても名前が出てこないのです。

というより、いくら江戸時代の風俗画を見ても、飯屋にも、蕎麦屋にも、居酒屋にも、こういうテーブルのようなものは見あたらないのです。

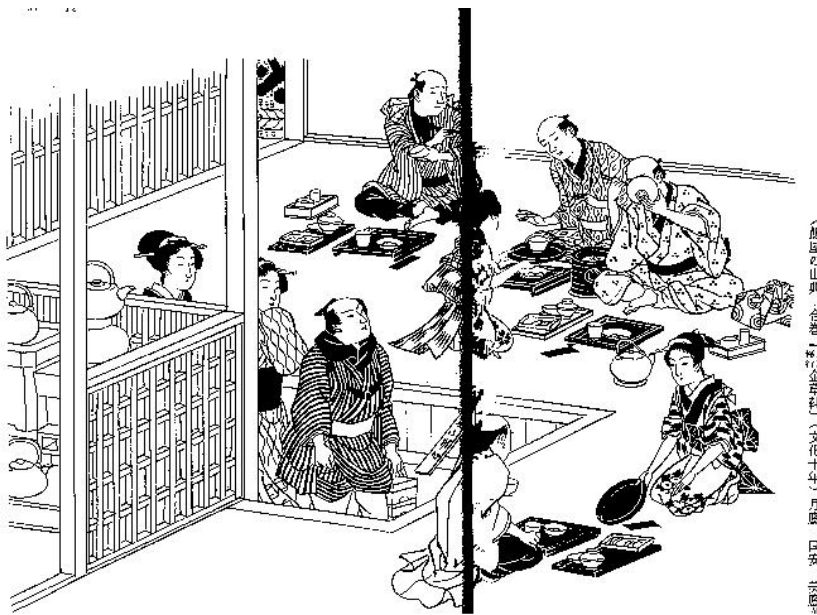
ひょっとして、これって、最近のもの？
そんなはずないですよ。

ということで、私、ずっと、浮世絵版画や草双紙などを気をつけて見ているのですが、今に至るまで、お目にかからない。

飯屋や居酒屋の店内を描いた絵は結構あるのだけれど、不思議に絵の中にはテーブルのようなものは見あたらないのです。

そんなはずはないとお思いの方が多と思いますので、とりあえず、代表的な絵を見てもらいましょう。

この絵は、一膳飯屋の店内です。



みんな座敷に上がって食べてますよねえ。
時代劇でよく見るテーブルも椅子もありませんでしょう。

それに、座敷に上がって食べている人たちの前には、お膳も座卓もありませんですね。
ご飯もお菜も汁も、座敷の上に直接置かれたお盆の上に乗っているでしょう。

一膳飯屋の中には、こういうスタイルもあったのかも知れないと思って、手持ちの風俗画をめぐってみても、出てくるのは、例外なく、この座敷スタイルで、食器は床に直置き。

じゃあ、蕎麦屋や居酒屋はどうか。

時代劇では、土間にもテーブル？と椅子（場合によっては空いた酒樽）が置いてあって、その上にお酒や食べ物を置いて、飲んだり、食べたりしてますよね。

まず、蕎麦屋から言いますと、一膳飯屋とほぼ同じスタイル。つまり、座敷、直置き。

居酒屋はちょっとスタイルが違うのですが、少なくともテーブルは見当たりません。

下の絵は、居酒屋の店内を描いた絵です。



左の方に、酒樽が置いてあって、燗をする器具が見えているけれど、お客は、なんていうのか知りませんが、細長い腰掛けのようなところに、めいめい勝手に坐って飲んでますね。

真ん中の下の人なんか、右手に「ちろり」、左手にぐい飲み、もう酔っぱらってるように見えますが、ちろりを置く食台はないから、直にこの縁台のような腰掛けに置くんでしょうねえ。

立ち飲みの人もありますね。

居酒屋の ねんごろぶりは 立って飲み （江戸川柳）

毎日のように居酒屋に通う居酒屋通は、立ち飲みだったのですね。

とにかく、これじゃあ、悪党どもが、顔を近づけて、隅の席でひそひそ話なんてできやあしないように思えますね。

池波センセ、どうなってるんでしょうか。

9.25 銭形平次と銭形警部

先日、お話しに出た三途の川の渡し賃にと私が用意した寛永通宝 6 枚。
寛永通宝と言えば、なんと言っても「銭形平次」。
といっても、ちょっと若い人には通用しないけど。

平次親分が投げるのは、真ん中に四角い穴が空いた寛永通宝。
寛永通宝には、裏に波が刻まれているものとそうでないものあって、波有りが 4 文、
波なしが 1 文。写真



この点については、「趣味の世界 2「映画武士の家計簿を見て」参照。」を見てもらうこと
にして、と。

ん、どっちを投げたかって？

これね、4 文銭の方だとする意見が圧倒的に多いのですね。

でもね、私は、1 文銭だと思っていたのですよ。

理由？

平次くんは、手下が八五郎一人しかいないし、長屋住まいだし、恋女房のお静さんも手
に職があるわけでもないから、無駄遣いはできないと思うのですね。

え、後で拾えばいいって？

平次親分のイメージを壊すようなことは言ってほしくないなあ！ By 平次ファン。

ところがね、私、あるとき突然思い立って、この投げ銭、実際に公園でやってみたこ
とがあるのですよ。

結果。

現実には、10 メートルも離れると全く当たらない。

この寛永通宝の 1 文銭、薄いので、どうしてもスライスしてしまう。

波あり 4 文銭の方も当たらないのだけれど、1 文銭より少し大きくて重いような気がし
て、こちらの方は多少当たりやすいかなと思ったのですね。

ですから、私の 1 文銭説は少し揺らいでいます。

当たらないのは、単なる私の運動能力の問題かも知れないんですけどね。

これ、野村胡堂さん、自分で確かめました？

さて、こんな平次親分、一度だけ、小判を投げたことがある。
彼の生みの親、野村胡堂さんは、「銭形平次捕物控」第一作「金色の処女」で、上様家光を救うために、小判を投げている。

えー、上様だったら、格上げして、小判投げるんだ。
イヤイヤ、実は、よく読むと、これは懐にたまたま小判と小粒しか持っていなかったためなんだけど。
これは、さすがに、後から拾ったんでしょうねえ。

ちなみに、銭形平次のモデルになったと言われているのは、水滸伝に出てくる「没羽箭張清」（ぼつうせんちょうせいと読みます）。
ただし、こちらの場合は、投げるのが石。つまりタダ。
中国のお方は、お金は死んでも投げない。
これは、私、最近やっとわかりました。

さて、私より若い方々には、銭形平次親分より「銭形警部」がよく知られているみたい。
実は、この銭形警部、本名は「銭形幸一」といって、銭形平次の7代目の子孫（六代目と言う説もある）らしい。
これ、私の個人的見解だけれど、銭形平次親分は、家光さんの時代ですから、寛永(1624～45)。銭形警部の平成(1989～)では年齢勘定が合わないような気がする。
でも、銭形警部は見てのとおり悪気は全くない男だから、経歴詐称があったとしても、この程度は許しちゃいましょう。

それより、彼は、警視庁警部なんだけど、東京の治安をほったらかしにして、ルパン三世の逮捕に命をかけている。(町奉行の石原さん、いいの?)

ところで、ルパン三世の映画では見たことがないのだけれど、銭形警部の得意技は、「手錠投げ」?

こちらもどうかとは思いますが、投げ銭よりはマシかなあ。



11.12 男は辛いよ武士の家計簿

磯田道史氏が7年前に書いた「武士の家計簿」が映画化され、12月に公開されるらしいので、再読してみました。

この本は、加賀前田藩の御算用者（会計・経理担当）を勤めていた猪山家の当主が残した幕末から明治にかけての37年間にわたる家計簿を、詳細に研究した結果をわかりやすく説明したものです。

猪山家の働き手は二人いて、父（信之）と息子（直之）どちらも加賀藩の御算用者、ダブルインカムなので、現在の収入に直すと家計の収入は1742万円（細かいデスネ、研究書ですから）。

さぞかし、豊かな暮らしをしているのかと思えば、借金で首が回らず、ケチケチ生活。ケチケチにならざるを得なかった理由は、極端に多い交際費。

武士の体面を維持するために、膨大な費用を使わざるをえず、破産寸前の猪山家は、家計の再建を目指して、殆どの家財を売り払うとともに、家計簿を付けて、節約生活に入るのです。

これを映画化するなんて、できるのかなあ。

これが、再読前の私の感想でしたが、再読後は、この本に書かれていることは、今の私達の間から見ても大変面白く、考えさせることが多いと思いました。

家計簿は、その家の生活をかなり正確に反映します。

この本は、幕末の下級武士の生活の実態を明らかにしたのですが、そこで明らかになったことの中には、これまで武家社会に関して多くの歴史家達が述べてきたことをひっくり返すものが沢山あったのです。

私が、一番面白いと思ったところを少しだけ紹介します。

幕末の猪山家は、おば様、父上様（当主）、母上様、息子（直之）、妻、娘の6人家族。それに家来1人と下女一人。

1700万円を越す収入に対して、家族が使うお小遣いは、全部あわせて163万円。

その配分は、次の通り（一年分）。

| | | |
|------------------|----------|---------------|
| おば様 | 銀 90 匁 | (35 万 9619 円) |
| 父上様 (当主 信之 68 歳) | 176.42 匁 | (70 万 4938 円) |
| 母上様 | 83 匁 | (33 万 1656 円) |
| 息子 (直之 32 歳) | 19 匁 | (7 万 5920 円) |
| 妻 | 21 匁 | (8 万 3915 円) |

娘 9 匁 (3 万 6088 円)
お嫁に行った直之の姉二人 各 5 匁 (1 万 9981 円ずつ)



ここで驚くのは、当主（父上様）よりも高い給料をとっている息子の直之の小遣いは、ナナなんと、一月当たり 5840 円。

また、おば様、母上様、奥さんといった女性達のお小遣いはかなりウェイトが高い。なんととっても、奥さんの小遣いの方が、一番の稼ぎ頭の直之より多い。家計簿からわかるのですが、直之は、妻から小遣いを借りている。さらに、お嫁に出した姉上達にも小遣いが配られている。

当時の武家の女性は、多いとは言えないまでも独立した財産を持ち、発言力も強く、歳をとるに従って、収入も増え、夫といえども、その財産には手を付けられないということらしい。実家との結びつきは結婚後もかなり強く、巷間よく言われているように、男性達から虐げられているわけではなかったらしいのです。

実際、この本で、著者は、武家の女性達の離婚率、再婚率がともにかかなり高いことを示しており、「貞婦は二夫にまみえず」というのも、全くのウソだったみたいです。独立した財産を持ち、実家からの支援を受けている武家の女性達は、夫の家に嫁いでも、いやになれば、とっとと離婚して、また別の男性と再婚しているのが、実態だったと言っています。

この部分を見ただけで、今まで私達が教わってきた江戸時代の武家の女性像とは全然違う女性達が見えてきます。映画では、ここんところはカットだろうなあ。

読み終えて、前には感じなかった、ちょっと割り切れない気持ちが残りました。猪山家で一番惨めなのは、直之。一生懸命働いて、小遣いは無いに等しく、月に 6 千円弱。これでは、うさ晴らしに飲みにも行けない。

今も昔も、いつの世も、男は辛いよ です。

さすらいの旅にでも出たい気持ちになりますね、直之さん。

12.3 4文銭と糸目

「武士の家計簿」でも出てきますが、どうして「波あり寛永通宝」は 5 文ではなく、4 文なんだろうかとこの質問をいただきました。

私、このとき、この質問に意表を突かれまして、およそ次のような趣旨の答えをしてしまいました。

私の答え

「私には、今、なぜ 4 文かという間に答える用意がありませんが、江戸の食べ物の値段の多くは、資料を見る限り、4 の倍数が多いような気がします。

一膳めし 12 文、屋台鮎 8 文、蕎麦 16 文、白玉冷水 4 文、砂糖水 6 文、お酒一升 260 文、上等清酒一升 332 文、甘酒 8 文、団子 4 つ刺し 4 文、大福 4 文等々です。

居酒屋の上等酒は 12 文。

『12 文飲んで向こうの顔をきき（柳多留）』

おごってもらったのですね。」

というものでした。

その後、気になって、ある「通貨史」を読んでいたたら、

「江戸時代の通貨は、金、銀、銭の三種類で、原則として 4 進法をとっていた」とありました。

4 進法！！ すっかり忘れていました。

そういえば…。

ちょっと悔しい！

その本によりますと、金貨も銀貨も、4 朱で 1 分、4 分で 1 両。

つまり、1 両は、一分金 4 枚相当、一朱金 16 枚相当ですね。

（なお、銀貨は、その重さで価値が決まる丁銀、豆板銀、それに五匁銀(12 枚で 1 両)もありました)

銭は、寛永通宝 1 文銭、寛永通宝 4 文銭、10 文銭の宝永通宝、100 文銭の天保通宝の 4 種類。

4000 文が 1 両でしたから、宝永通宝は 400 枚、天保通宝は 40 枚で 1 両です。

ただ、銅の不足から作られた 10 文銭の宝永通宝は極めて評判が悪く、1 年で鑄造が停止され、流通も殆どしていなかったようです。

また、幕末、幕府財政の悪化から作られた天保通宝は、額面 100 文であったにもかかわらず、80 文として流通したとされています。



ちょっと説明が詳しくすぎましたが、要するに、波あり寛永通宝の4文は、江戸時代に採用されていた4進法によって、5文ではなく4文とされたということのようです。

ところで、なぜ4進法だったのか。

これは、武田信玄の鑄造した甲州金が4進法をとっていて、武田家の遺臣、遺産の多くを引き継いだ徳川家がこれを踏襲したとされています。

なお、武田の甲州金では、両、分、朱の下は、「糸目」という単位だったのですが、これは採用されていません。

でも、江戸幕府によって採用されず滅びたはずの「糸目」という単位は、「金に糸目はつけない」という言葉で現在まで引き継がれています。

不思議なことです。

8.22 江戸の単身赴任 1

私の単身赴任歴は、京都 4 年、鹿児島 2 年、仙台 10 年、それに都内 1 年の合計 17 年。

社会人としての 41 年間のうち、約 4 割が単身生活ですから、普通の方よりもきっと多いのでしょうね。

17 年間も単身赴任をしていると、日常生活のたいていのことは経験し、たいていのことは自分でできるようになります。

今は定年退職して自宅に戻りましたが、この後もし、家内から三行半を叩き付けられても、この単身赴任経験で、なんとか生きていけるのではないかと思いますね。

ところで、単身赴任は、万葉の昔からあったのですが、今のようなサラリーマン的単身赴任が増えたのは、江戸時代からではないかと思えます。

ご承知のように、江戸幕府は、2 年から半年の周期で三百諸侯に参勤交代を義務付けていましたが、その江戸屋敷には、代々江戸屋敷勤めの藩士と国表から参勤交代に合わせて江戸屋敷に出てきて勤務する藩士がいました。

国元から交替で江戸屋敷に勤める藩士は、勤番侍と言われていますが、これらの国元からの藩士達の多くは、単身赴任だったことが知られています。

で、私、最近、この単身赴任をしていた江戸屋敷詰め勤番侍が書いた江戸での生活日記（「幕末単身赴任 下級武士の食日記」）を読む機会がありました。

なかなか、面白かったので、何回かに分けて、紹介したいと思えます。

この日記の主人公は、紀州徳川藩の下級藩士、酒井伴四郎クン 28 歳。

妻と子を和歌山においての単身赴任です。

伴四郎クンの扶持は 30 石。年収 30 両程度ですね。

今のお金に換算するのは、なかなか難しいのですが、私の感覚では、1 両 = 10 ~ 15 万円ではないかと思えますので、現在では、年収 300 ~ 450 万円。

でも、今と違って、重い税金も社会保障費も払わなくて済みますから、実質所得換算だと年収 400 ~ 500 万円のサラリーマンと言ったところでしょうか。だとすると、中所得階級かな？

違う？

多すぎるって？

実は、専門家と言われる方々の計算は、確かにもっと少ないのです。

何と比較するかによって結論が大きく違うのですが、ある著名な専門家の 1 石 4 万円という試算を元にすると、伴四郎クンの年収は 120 万円。

どう思います？

素人が言うのも変なのですが、江戸の人々の生活を描いた記録を見ると、どうみても、今の年収 120 万円の人々の生活とは思えない、そんなにミジメな感じはないですね。そこに登場するお侍さんも、大工の下働きクンも、棒手振りのお兄さんも、いつもなんの苦労もないかのように明るく笑い転がっているのですから。

いや、この生活レベルでの江戸時代と今の時代の比較は実に難しいのです。

さて、この伴四郎クンですが、彼も、実はいきいきと江戸での生活を謳歌しています。日記を読む限り、決して贅沢な生活ではないものの、甘辛両刀使いの伴四郎クン、結構、何かと言っては酒を飲み、毎日のように、ウマイ、マズイと言いながら、様々な江戸の食生活を楽しんでいます。

呆れることには、彼、常磐津のおっ師匠さんに惚れて、せっせと稽古通いするんですから、とても、貧乏侍とは思えませんね。でも、常磐津のおっ師匠さんには相手にされなかったようですね。

女には 御縁つたなき 浅黄裏

こんな生活を可能にした秘密は、おそらく単身赴任手当にあるんじゃないですかね。まあ、当時は、単身赴任手当とは言わなかったでしょうが、彼の場合、江戸詰手当がナント年間 39 両出ているのですね。本給より多いんですね。さらに、食費の米は現物支給。

いかに江戸の物価が高いといっても、国元より、ずっと良い生活ができた筈です。

でも、彼は、感心にも節約を心がけていて、細かく出費明細をつけていました。

年間支出総額は 23 両。

収入との差は、46 両。結構呑んで食って遊んでいるんだけど、本質的には堅実なお侍さんだったようです。

ところで私の場合、単身赴任手当は、月 2 万円、年 24 万円でした。

羨ましいなあ。

江戸時代に生まれてきた方が良かったかなあ。

8.23 江戸の単身赴任2

昨日の続きです。

伴四郎クンが江戸に赴任して、住むこととなったのは、紀州藩の中屋敷の中にある長屋でした。これは、今の赤坂東宮御所のあるところにあつたようです。

紀尾井坂にあつた上屋敷は、1823年の火事で焼けてしまったものですから、この時紀州藩の中屋敷は、上屋敷を兼ねていました。

彼が入った長屋は、間口一間半で三間あるものでした。ここに、和歌山から一緒に出てきた三人が入りました。一人一間。ちょっと前までよく見られた会社の家族寮（3K）にまとめて入れられたと思えばいいみたいです。一間の広さはわかりませんが、竈付きの台所が付いていたようです。

写真は、藩邸の長屋を外側から見たもの（この写真は秋月藩のもの）



伴四郎クン、この長屋を根拠地に、江戸の町を歩き回り、食べ歩きに精を出すのですが、意外や意外、この長屋、鍵がかかるのですね。

私、藩邸内にあるのだから、鍵をかける必要などないのではと思っていたのですが、この日記を読んでいますとね、藩邸内には非常に多くの商人たちがしょっちゅう出入りしているんですよ。

単身赴任の勤番侍が沢山いますから、毎日食べるおかずを惣菜売りから買ったり、ずぼらな者は、洗濯を頼んだりしてます。

まあ、こういう人たちが出たり入ったりしているですから、伴四郎クンのように、単身赴任手当を貯め込んでいる人には鍵は必要だったのですねえ。

日記では、鍵を持った同室者が帰っていなかったために、閉め出された時のことが出てきますが、彼、困惑するかと思ったら、そのまま湯屋に行つて、また遊びに出かけています。伴四郎クン、気楽な性格みたいですね。

さて、その伴四郎クンの江戸での勤務状況ですが、殆ど働いていないんですね。

昔、元禄お豊奉行（尾張藩）の日記を読んだときにも感じたのですが、芝居見物（禁じられていましたので町人のなりをして）や釣りばかりしていて、コイツほんとに働い

てないな、と思ったのですが、今回の単身赴任の伴四郎クンもそれに輪をかけています。

どれくらい仕事してたと思います？

江戸藩邸に赴任した次の月の一ヶ月間に勤務に就いたのはたったの6日間。

しかも勤務と言ったって、午前中の2時間だけですからね。7月（旧暦）なんかは一日も勤務に就いておらず、夏休みがあったのかと思ってしまう。

それでも、国元のお勤めより働いていたというのですから、今の目から見ると、給料ドロボーと言われそう。

レンホー行政改革大臣、タイムスリップしたら、泡吹いて卒倒するんじゃないかなあ。

さて、こういう勤務状況ですから、江戸名所見物や食べ歩き的时间は有り余るほどあったようです。

今と違ってどこに行くのも自分の足ですから、毎日のように出歩くのも大変かと思うのは、現在の軟弱な私たちの感覚。赤坂・浅草間なんて7km以上あるのに、ちょっと遊びに行ってくるという感覚だったみたいですね。

ということで、よく見物に出かけ、よく食べ、よく呑む毎日です。

食べて呑むだけなら、余りお金も使わないで済みますからね。

昔から、湯水のようにお金が出ていくのは、なんと言っても、女性との遊びと博奕と決まっていますから、これに手を出さなかった伴四郎クンは賢明でした。

といっても、浅黄裏の伴四郎クン、とてもモテそうもなかったみたいですけどね。

さて、今日、触れておきたいのは、彼の間食生活。

なんと言っても驚嘆するのは、ものすごい頻度でお菓子を食べている。

私も、お菓子好きでは人後に落ちないつもりですが、とても敵わない。

日記に出てくるのをざっと挙げてみだけでも、

おてつ牡丹餅（おてつというのは有名な店の名前）、金龍山浅草餅、目黒の餅花、永代団子、今坂餅、日暮里の羽二重餅、墨堤長命寺の桜餅、助惣焼（すけそうも有名な店の名前）、平川天神の芋かん、焼き芋、両国広小路幾代餅、一ツ木の汁粉、甘酒、月見団子、玄亥の餅などが次から次へと出てきます。今も結構残ってるのがありますが、写真は、金龍山浅草餅。



お内儀は 浅草餅を とってなげ

これ、わかります？

吉原帰り、言い訳に浅草餅をみやげにしたと気付かれたのですね。

伴四郎クン、牡丹餅、汁粉、焼き芋がとりわけ好物だったようで、しばしば出てきます。汁粉は、江戸に出てすぐの旧暦6月8日（今年だと新暦7月8日）に食べて以来、毎月のように食べています。

夏にお汁粉？

私たちが、汁粉を食べるのは普通晩秋から冬にかけての寒い時期。

でも、江戸時代は夏でも平気で熱いものをたべていますね。

甘酒も夏に飲んでますし、どじょう総理のせいで最近注目されるようになった泥鰌鍋も冬ではなく、夏の食べ物なんですね。

江戸時代の夏って涼しかったのかな？

8.24 江戸の単身赴任 3

酒井伴四郎クンが単身赴任を始めたのは、万延元年(1860年)。

万延元年と言えば、維新まであと8年の騒然とした時代だったはずなのですが、伴四郎クンの日記を読む限り、それ、どこの国のこと？ と言わんばかりのノホホンとした毎日です。

下級武士にとっては、倒幕も開国も関係なかったんでしょうかね。

このことは、忍藩10万石の下級藩士尾崎石城クンが、文久元年(1861年)に書いた絵日記の記述を見ても、同じなんですね。

尾崎クンは、藩政に関する改革案を提出し、左遷されるほどの知識人なのですが、その生活には、時代の激動の影を全くといっていいほど見出すことができません。

不思議ですねえ。

時代が大きく変わるときの庶民ってこんなものでしょうか。

時代の激変をよそに、伴四郎クン、毎日の食事にいそしみます。

伴四郎クンの食事は、藩邸長屋での自炊がメインだったようです。

藩邸には、毎日のように、野菜や魚介などの食材を売りに来ますから、これらの棒手振り商人から旬の安いものを買って、自分で調理しています。

ご飯は、同居している3人が順番で炊くことになっているようなのですが、不思議なことに、総菜は各自自分で調達するルールだったようです。

伴四郎クンの同居者の一人は、彼の叔父に当たる宇治田平三。

これが図々しいヤツだったようで、伴四郎クン、自分が食べようと作ってあった総菜を平三叔父に盗み食いされて、何度も悔し涙を流すのですが、そういうところを読んでいると、カワイソーになってしまいます。

いつの時代にもいるんですね。こういう図々しいヤツって。

お菓子とお酒が大好きな伴四郎クンですが、もともと国元ではピンボー生活だったせいかな、自炊生活での食事は簡素です。

オカズとして登場する魚は、たいていが鰯。ちょっといいとボラ、サンマ。

あるとき、大奮発してカツオを食べたのはいいけれど、ツキのない伴四郎クン、これに当たって、同居者共々七転八倒です。

自炊で、一番多く登場するのは豆腐です。それがなぜか、買うのは焼き豆腐や揚げ豆腐なんですね。冷や奴や湯豆腐にすることが多いんだけど、まさか焼き豆腐を使ったんじゃないですよ。

豆腐は、単身赴任者のつよ一い味方ただただじゃなくて、下級武士にとってなくてはならない食べ物だったようです。

先ほど掲げた「幕末下級武士の絵日記」の主人公、十人扶持の忍藩藩士尾崎クンの毎日の食事の献立を見ても一番良く出てくるのは豆腐。
ビンボー武士の最大のタンパク源でした。

さて、外食は、そばと寿司が圧倒的に多いですね。
蕎麦は16文。年間に30回以上食べています。しかも、だいたい2度に一度は酒を飲んでいる。
天ぷら蕎麦は32文。
お酒は上等なもので1合40文。
寿司は1個4~8文、年間14回も食べている。でも卵焼きは16文と高かったようで、これは敬遠。

その他で目立つのは、泥鰯汁。16文と安かったのです。年間10回近く食べているだけでなく、自分で作っています。なぜか泥鰯の丸煮は高く48文。
泥鰯も、比較的身近で手軽なタンパク源だったようです。

これ泥鰯 などとお留守居 毒を言い

これは、今の私たちにはわかりづらいですね。泥鰯は芸者のこと。
お酒を飲ませると踊るからですかね。

あ、そうそう、タンパク源と言えば、この日記が書かれた幕末には、猪も豚も、よく食べています。
但し、どこか後ろめたい気持ちがあったのでしょうか、伴四郎クン必ず言い訳するのです。
このところ、風邪気味なので、今日は「薬食い」だと。つまり、風邪薬の代わりに栄養をとるのだというのです。

伴四郎クン、単身赴任なのに、式日もよく守っていて、年中行事の食事もしっかりと作って食べています。

正月の七草がゆ、端午の節句の柏餅、七夕のそうめん。

中秋の名月には、出入りの商人から貰った白玉粉で月見団子も作っています。

大変よくできたようで、

「誠よく出来、皆甘狩(うまがり)候」

と日記で自画自賛です。

藩邸内の仲間にご馳走していますが、ちゃんと里芋と枝豆を添えていますから、たいしたものです。

どうです。

少しは見習って、作ってみませんか。